

# 桐が谷通信

CHUBU GAKUIN UNIVERSITY  
CHUBU GAKUIN COLLEGE

第39号

2008年11月28日

発行 中部学院大学 宗教委員会  
中部学院大学短期大学部

〒501-3993  
岐阜県関市桐ヶ丘二丁目1番地 TEL (0575) 24-2211

## クリスマスが12月25日になった由来

中部学院大学 宗教総主事 笠井恵二

今日われわれは、クリスマスを12月25日に祝っています。しかし、これはキリスト教の歴史で最初からそうだったわけではありません。以下、オスカー・クルマン著『クリスマスの起源』（教文館）に依りつつ明らかにしていきましょう。

ルカ福音書の降誕物語では野宿をしている羊飼について述べられていますが、パレスティナにおいては羊飼いは3月から11月まで野宿しますので、イエスの誕生はこの季節だったと考えられます。しかし2世紀の異端グノーシス主義者バシレイデスの一派は1月6日にキリストの洗礼を祝っていました。彼らは、神なるキリストは地上のイエスの洗礼のさいに初めて「現れた」と考えていました。この1月6日にバシレイデス派により祝われた洗礼祭の習慣を、教会は受け入れました。そして福音書のイエスの誕生物語に即して、イエスの洗礼ではなく誕生こそが、キリストの地上への顕現であると見なすようになりました。こうして4世紀の前半には教会は1月6日に顕現祭を祝っていましたが、そのさい「キリストの洗礼と誕生」が結びつけられました。そして、1月5日から6日にかけての夜にはキリストの降誕が、6日にはキリストの洗礼が祝われていました。



12月25日に降誕祭が行われるようになったのは、コンスタンティヌス大帝治下（306-337）のローマで325年から354年までの間だったろうと考えられます。もともとローマでは、12月25日は太陽神をまつる特別重要な日として祝われており、大帝は意識的に太陽崇拝とキリスト崇拝とを結び付けようとしたのでしょう。当時ローマ帝国では、太陽を崇拝するミトラス教が普及しており、その主祭日が、暗黒に対する太陽の勝利の日としての冬至にあたる12月25日に祝われていました。冬至の日から昼が夜よりも長くなるからです。そしてキリストの地上への顕現祭には、そもそも新約聖書に由来するものとして、闇の中に輝く光のイメージが内在していました。すでにローマの皇帝たちは、ミトラス教の導入以前に「不敗（不滅）の太陽」をまつる神殿を建てていました。そして3世紀には、12月25日に新たに昇り始める勝利者なる太陽を称えるために、荘厳華麗な競技が催され、太陽が地平線上に昇るのを助けるために、おびただしい焚き火が焚かれました。もともと大帝は「シンクレティスト」（宗教混淆主義者）だったらしいのですが、異教の中の価値ある要素をキリスト教に取り込むことによって、一つの総合を達成しようとしたようです。キリスト教は、その組織力により、帝国を統一するのに最適な宗教となったことは確かですが、おそらく大帝は、キリスト教という統一的な枠組みの中で、人々が従来通りの非キリスト教的な慣習を続けようという宗教的融和状態を狙っていたと考えられます。大帝は、個人的には臨終のときにやっと洗礼を受けたわけで

すが、それまでは異教を捨てなかったのです。彼が、太陽はキリストの象徴であるという、すでに存在していた観念を利用して、太陽崇拜をキリスト崇拜と統合しようと考えていたことは間違いありません。

またこの目的のために大帝は321年、キリスト教の「主の日」を帝国の週ごとの休日としました。こうして日曜日が聖日となったわけですが、もともとはこの日が太陽神をまつる日だったので、ドイツ語の日曜日は、「太陽の日」(Sonntag=日曜日)となっているわけです。現在では、ローマ・カトリック教会とプロテスタント教会は12月25日に救い主の降誕を祝っていますが、1054年にローマ・カトリック教会と決別した東方正教会に属する教会でこの日にクリスマスをお祝いしているのは、コンスタンティノープル、アレクサンドリア、ア

ンテオキア、ルーマニア、キプロス、ギリシア、フィンランドの教会であり、1月6日に祝っているのは、エルサレム、ロシア、セルビア、ブルガリア、グルジア、ポーランド、チェコスロヴァキアなどの教会です。

このように見てきますと、クリスマスをお祝いする日にも、いろいろの経緯があったことが分かります。



## クリスマス献金のお願い

宗教総主事 笠井 恵二

今年も主イエス・キリストのご降誕をお祝いするクリスマスの季節がやってきました。クリスマスは、主イエス・キリストがご自身のすべてを人々の幸せのためにささげつくしたことに因んで、少しでも私たち自身の一部を人々の幸せのためにささげ合うことを実践する季節です。本学合同宗教委員会では慎重に話し合った結果、今年も昨年同様に例年献金をしている諸団体及びインド・ジャワ島地震災害救援のために活動している団体に協力し、皆様への献金呼びかけを「2008年11月25日(火)～12月25日(金)」の期間で実施することになりました。その具体的な献金計画は以下の通りです。みなさまのご協力を何卒よろしくお願い申し上げます。

尚、昨年度は、194,355円の暖かい献金をいただきましたことを報告いたします。

- ◎ 献金はクリスマス献金袋(献金箱横にあり)に献金を入れ、総務課カウンターに設置していますクリスマス献金箱に献金ください。ご協力を宜しくお願い致します。

### 「2008年度中部学院大学・中部学院大学短期大学部クリスマス献金」

「神様の御旨のままに従い ①日本と世界の各種災害被災者を覚えて  
②いのちの大切さを覚えて」献金をささげます。

- 献金予定先：①日本キリスト教団各種災害救援支援 ②キリストへの時間  
③岐阜いのちの電話 ④愛知老人コミュニティセンター  
⑤社会福祉法人 あゆみの家 ⑥岐阜野宿生活者支援の会 他



(4頁より続く)

モラルの問題よりも権力の維持が問題なのです。そこに権力者の弱さがあるのです。

「東方で見た星」は学者たちを導いてヘロデのもとにはなく、幼子の生まれた家に導きました。そこは都ではなくベツレヘムの小村でした。学者たちはそのことで「喜びにあふれた」と聖書は記しています。学者たちはひれふして幼子を拝み、それぞれの贈物を献げました。学者たちはなぜ喜んだのでしょうか。それは学者たち自身がほんとうに仕えるべきものは権力に対してではなく、生命だと知らされたからではないでしょうか。学問的知性のあり方、方向性がここで問われたのです。学問的知性とその営みは権力者ヘロデに仕えるべきものではなく、生命そのものである幼子に仕えるべき事が示されたのです。その認識がこの学者たちをあふれる喜びに導いたのです。

大学は知性の府と言われます。その大学で養われる知性はどのような方向で発動するのでしょうか。民衆を支配し抑圧する権力に仕える方向で発動するのか、それとも貧しさや病や様々な重荷に苦しむ民衆に仕える方向で発動するのでしょうか。

この学者たちは新しい、喜ばしい使命の認識と共に権力者ヘロデと訣別して、「別の道を通して帰って行った」のでした。

## ＜2008年度 チャペルアワー後期予定表＞

中部学院大学・中部学院大学短期大学部 宗教委員会

後期チャペルアワーも残り少なくなってきました。お誘いあわせてご参加ください。

### 関キャンパス

実施日	曜日	役 職	担当者氏名	所 属	教会名
12月8日	月曜日	宗教総主事	笠井 恵二	中部学院大学	
11日	木曜日	牧 師	西堀 則男	日本キリスト改革派教会	関教会
15日	月曜日	短大 学長	片桐 多恵子	中部学院大学短期大学部	
18日	木曜日	事務局次長	田口 清吾	中部学院大学	
22日	月曜日	クリスマス礼拝			
1月5日	月曜日	宗教主事	志村 真	中部学院大学短期大学部	
8日	木曜日	講 師	ダーリンブル規子	中部学院大学短期大学部	
15日	木曜日	牧 師	中根 汎信	日本キリスト改革派教会	那加教会
19日	月曜日	宗教総主事	笠井 恵二	中部学院大学	

### 各務原キャンパス

実施日	曜日	役 職	担当者氏名	所 属	教会名
12月11日	木曜日	宗教主事	志村 真	中部学院大学短期大学部	
18日	木曜日	牧 師	小 峯 明	日本キリスト改革派教会	岐阜加納教会
1月8日	木曜日	課長補佐	菊池 真	中部学院大学	
15日	木曜日	教 授	山田 陽子	中部学院大学	

### 岐阜済美学院年題聖句 (2007年度～2008年度)

「憐れみ深い人々は、幸いである。その人たちは憐れみを受ける。」

(新約聖書(新共同訳)：マタイによる福音書5章：7節)

## 2008年度 クリスマス礼拝 「東方で見た星」

日本キリスト教団 牧師 関田 寛雄 先生

日 時：12月 22日(月)

11：00～12：30

(第2時限の講義は行いません。)

会 場：グレースホール

### 講師プロフィール

1928年、北九州市小倉に生まれる。関西学院中学、青山学院大学神学科を経て日本基督教団牧師になる(1954年)。川崎市に開拓伝道に入り(1955年)、川崎桜本教会、川崎戸手教会を設立。この間、青山学院大学教員として40年勤務し、1997年定年退職。現在はキリスト教団巡回牧師。著書に「聖書解釈と説教」「十戒・主の祈り」「われらの信仰」(共に日本キリスト教団出版局刊)などがある。趣味は映画鑑賞。自他共に認める「フーテンの寅」ファンである。



クリスマスに当りマタイによる福音書第2章から、最初のクリスマスを迎えた「東方から来た占星学者たち」の物語から、クリスマスの今日的意味を考えてみたいと思います。題して「東方で見た星」といたしました。

聖書において「東方」とはあまりよい意味の方向ではありません。例えば創世記3章のアダムとエバは禁断の木の実を、神の戒めに反して食べてしまい、そのため楽園を追放されますが、それは「エデンの東」でありました。また二人の間に生まれた「カインとアベル」の兄弟は神への供え物をめぐって兄が弟を殺すという事件が起き、兄は神により追放されますが、それはエデンの更に「東」でありました(創世記4章)。更に11章の「バベルの塔」の物語は、人間がその技術の成果を誇り、神の座である天にまでとどかせようと、レンガで塔を造りかけましたが、その傲慢な試みは神の審きを受け、塔は未完成で終り、人は互いに通じない言葉を語るようになりました。この試みを始めた人々は「東の方から移動してきた人々」でした。

しかしながら新約聖書冒頭のマタイによる福音書においては、「東方の学者たち」に先ず救い主誕生を告げる「星」が現れました。ユダヤの都エルサレムの人々が気付かぬ間に、先ず東方の「異邦人」にクリスマスの星は輝いたのです。この一事の中に既にクリスマスの意味が明らかにされているのではないのでしょうか。かつては神の怒りにより「東」に追いやられた人々が、今や救い主の誕生を最初に示されることになったのです。民族の枠を越える普遍的なキリストの救いが告げられているのです。

「異邦人」の学者たちの訪問によって、ユダヤの都エルサレムの人々に、特にヘロデ王はうろたえて、自分の王位を固守するために、「ユダヤ人の王」として生まれた男子を亡き者にしようと画策いたします。権力者は自らの権力の喪失を何よりも恐れます。権力者にとって大切な事は、

(3頁へ続く)